



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	A Life Lived Punk : Live Music and Intergenerational Relationships in Aging Japan
Author(s)	レットソン, ジェームス デウィー
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16978号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16978
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99822
Type	doctoral thesis
File Information	James_Letson_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名：レットソン ジェームス デウィー

学位論文題名

A Life Lived Punk: Live Music and Intergenerational Relationships in Aging Japan

（パンクとして生きていた人生——高齢化日本におけるライブ音楽と世代間交流）

本論文の主な目的は、1980年代から札幌を拠点として形成されてきた、パンクという音楽実践を通じてつながったコミュニティ（以下、パンク・コミュニティ）の成り立ちと継続性を明らかにすることである。とりわけ、本論文は、同コミュニティにおける世代間関係に焦点を当て、その生成過程を分析し、プレカリティ（不安定な状態）に満ちた高齢化社会において、世代間の関係がいかにより自発的に生じうるかを考察する。

本論文の背景となる問題意識および先行研究への視座は以下の通りである。まずは、少子高齢化が進む日本社会を対象として人類学的な先行研究においては、良好かつ持続的な世代間関係の構築が困難であるがゆえに、高齢人口が孤立し、プレカリティに陥る傾向が強まっていると論じられてきた。また、世代間交流は、制度的な仕組みや対策的な介入が存在しない限り、自発的には生じにくいという前提がしばしばみられると、本論文が指摘する。

これらの議論に対し、本論文は札幌のパンク・コミュニティに着目し、音楽実践にとどまらないパンクの総合的な実践を通じて、世代間の交流が自発的に生じてきたことを明らかにする。さらに、こうした交流が互いのケアを基盤として社会的な安全性の形成につながっている点を提示する。本論文は、こうした現象が世界各地に存在するパンク・コミュニティに普遍的に見られるものではなく、札幌という都市の特定の社会的・歴史的な文脈に根ざした特徴であると論じる。パンク文化に関する先行研究では、パンクを起点とする文化やライフスタイルは若者文化として位置づけられ、構成員は年齢を重ねるにつれてパンクの実践から離れ、より安定的で主流社会に適合した生活を選択する傾向があるとされてきた。これに対し、本論文は、札幌のパンク・コミュニティでは、パンクの実践を継続するために、あえて社会的な安全性が十分に保障されない職業やライフスタイルを自ら選んでいるが、コミュニティ内部からケアの形で社会的な安全性が提供されている点を新たに示す。例えば、東日本大震災およびCOVID-19（新型コロナウイルス感染症）の際には、パンク実践の拠点であるライブハウスがコミュニティの構成員による資源の持ち寄りや相互支援の場となったことが挙げられている。本論文は、札幌のパンク・コミュニティにおける世代間関係の生成過程を明らかにすることで、世代間交流をめぐる人類学的研究に新たな視座を提示すると同時に、高齢化が加速する日本社会に対して有効な知見を提供することを目指す。

本論文は、世代間の関係性に関する人類学（Anthropology of Intergenerational Relationality）を再検討し、その根底にある理論的な課題を指摘する。従来の研究では、世代関係が血縁／非血縁、利害関係／ケア関係といった二項対立的枠組みによって整理されてきた。しかし、こうした整理は、私的・情動的領域と公的・構造的領域を暗黙のうちに分離する前提に依拠している。札幌のパンク・コミュニティでは、血縁／非血縁、利害／ケアが混在する関係性が明らかになって、この二元論を超える分析を可能としている。本論文は、関係性をあらかじめ機能や意味をもつものとして理解するという、先行研究にみられる立場に疑問を呈し、人類学で論じられてきた「関係性」の概念に立ち戻って、関係そのものがいかに生態学的かつ構成的であるかを問う、関係性の生成と過程に目を向ける存在論的な、独自で新たな視座を提示する。

以上の視座に基づき、本論文は札幌のパンク・コミュニティを対象として次の研究設問を設定する。第一に、個人のエージェンシー（行為主体性）と集団の結束性は、時間の経過の中でどのように相互に作用し、効果的かつ長期的な世代間関係を可能にする条件を生み出してきたのか。第

二に、これらの世代間関係はコミュニティの社会的空間にどのような影響を与え、いかにそれを形成してきたのか。第三に、高齢化が加速する社会的な状況の中で、社会的プレカリティへのアプローチに対し、札幌のパンク・コミュニティから何を学ぶのか。

上記の研究設問への答えを導くにあたって、本論文では札幌のパンク・コミュニティをフィールドとし、構成員および関連する実践に着目し、聞き取り調査と参与観察を実施した。本論文が依拠するのは7年間にわたる長期的かつ継続的なフィールドワークから収集したデータである。調査と執筆の際にはインフォームド・コンセントやプライバシーの保護など研究倫理上の手続きを十分に踏まえた。

本論文の構成は以下の通りである。全体は5部構成で、それぞれの部において異なる側面からパンク・コミュニティの成り立ちとその継続を明らかにする。序論にあたる第1部では、オープンニング・ヴィネットでフィールドの状況を描写した上で、続く第1章で研究背景および先行研究の整理を行い、本論の視座を提示する。第2部から第4部では、パンク・コミュニティを「プロセス（過程）」「パワー（権力）」「エフェクト（効果）」という三つの側面からコミュニティの形成と継続、ならびに世代間関係の諸相を分析する。

第2部「過程」は第3章と第4章から構成される。第3章では、札幌市の歴史および日本におけるパンクの歴史を概観し、フィールドワークのデータに基づくオーラル・ヒストリーの前半を提示する。第4章では、構成員がパンク実践を通じていかなるコミュニティを経験し、実践しているのかを検討し、その特徴として世代横断的な「実践共同体」と「ケア共同体」が同時に成立していることを明らかにする。

第3部「権力」ではパンク・コミュニティ内部における関係性の力学を扱い、第5章および第6章から構成される。第5章では、50歳以上の8名の構成員のライフストーリーを紹介し、彼らはいかにパンクとして生きてきたのか、その経験を描写する。第6章では、権力を支配と服従という古典的な枠組みから切り離し、「社会的な重力」という概念を用いて再検討し、各人の実践がいかにコミュニティへの「アンカー（錨）」となっているかを論じる。続く第7章では、パンク・コミュニティのオーラル・ヒストリーの後半を提示し、研究者自身も当事者として登場する、現在に至るまでのコミュニティが描かれる。第8章では、「ヘテロトピア」の概念を分析枠組みとして用い、パンク・コミュニティが曖昧さや矛盾を内包しつつ、それをむしろ共同体維持の装置として機能させている点を分析する。

第5部にあたる第9章では、序論で提示した視座に立ち返り、本論で明らかとなったパンク・コミュニティの成り立ちと継続性、ならびにその内部における世代間関係を総括する。本論で示してきた分析を振り返りながら、札幌のパンク・コミュニティの事例が、世代間関係のあり方をどのように捉え直しうるかを考察し、高齢化に直面する日本社会に対していかなる知見を提示しうるかを検討し、本論を結ぶ。